

# 留学・論争・恋文

——夏目漱石「薙露行」の周辺——

中原章雄

## 1 破られなかった恋文

もうかなり以前のことになったが、江藤淳と大岡昇平の間に行われた論争について、書いてみたいと思っていた。それは、夏目漱石の初期の短篇「薙露行」の読み方をめぐる論争であった。その当時、ともに大きな影響力を持っていた二人の文学者の間に激しく行われた論争であった。

この論争についての資料をいろいろと読んでいる間に、私は「夏目漱石展に寄せて」と題された、大岡昇平の短い文章を見つけた。

それは、一九八七年に東京の百貨店を会場として行われた「夏目漱石展」に初めて展示されたという手紙に関して、大岡が書いた短文である。

夏目漱石の妻鏡子が、ロンドン留学中の漱石宛てに書いた手紙がその時に「初展示」される機会に、その手紙の意義を解説した大岡の短い文章である。

漱石が留学中にロンドンから「御前が恋しい」と書いたのに対し、鏡子の方も返事に、「あなたの事を恋しいと思ひ続けていることでは負けなつもりです。」と書き、さらに、「この手紙読んだら破って下さい」とつけ加えてあったという。大岡昇平の解説によれば、しかし手紙は破られず、漱石の弟子でもあった故野上弥生子の別荘で発見されたという。

大岡昇平は、手紙がこの百貨店の漱石展で「初展示」されるのだと解

説したあと、この手紙は、「漱石夫婦のお安くない関係に新しい光をあてるものといえる」とつけ加えている。じつさい大岡は、二人の「お安くない関係」を知って驚いたに違いない。だが、それと同時に、自分と江藤淳との間に行われた熾烈な論戦のことも思い出していたのではなからうか。それは、漱石夫婦の愛情のことが、直接からんでいたからである。

(第一節全体の注)

大岡昇平は、『小説家夏目漱石』の中の一章、「姦通の記号学」の最初で、検閲が姦通に厳しかった時代に、「漱石のように新聞という大衆小説的枠内で、姦通小説を書いた男は珍しい」と述べている。重要な指摘であろう。そのあとに、英詩でも同じ題材を扱ったが、「性的にはぶきつちよで、表現がまずいから妙なのです」とも書いている。さらに、その次に、「実生活ではあつさりしていたらしい徴候があります」ともつけ加えている。大岡家の「実生活」を探る時間がないし、戦後のアメリカの翻訳文献のとうとうたる流入に大岡が無関心であったはずはないが、今は問いを控えよう（私は、小さな本屋の息子だったので、『キンゼー報告』のような高価で大部の調査資料を平凡な市井のおっさん風の男が買って行くのに驚いていた記憶がある）。大岡はフロイトへの関心は顕著だが戦後の批評家として突出してはいない。

漱石は実生活では「あつさり」という典拠は記されていないが、鏡子

との間の子供数から見ると、むしろ鏡子は明治の女としては普通の多産系ではなかったか。

## 2 論争の背景

大岡昇平と江藤淳は、アーサー王伝説についての論争が行われていた当時、有名な文筆業者であった。しかしながら、それから約四十年を経た今日、二人の重要な著作についてすら、それほどよく知られているとは云えない。ともに外国文化についてよく知る二人について、漱石の留学後の著作とのかかわりを考察するためにも、彼らの主な著作を多少振り返ってみたい。

江藤について云えば、彼の『アメリカと私』は、彼の著作活動全体の上でも重要である。アメリカに関する情報があふれている現代と違って、若い江藤の武者修行的な旅行記は、その当時はいかにも新鮮な香りをはなっていた。私は今度この本を読み返して見たが、最初に読んだのは、刊行後間もない、今から半世紀前のことである。にもかかわらず、この本のハイライトとも云うべき三つの出来事の叙述は、いまもかなり鮮明に記憶していることを確認した。

最初に、渡米直後に同伴した夫人が体調を崩して入院する場面がある、慣れない外国での突然の入院という事態を、江藤は何とか切り抜け、むしろ妻の入院をきっかけに、アメリカ流の生活習慣を身につける契機としてしまう（云うまでもないことだが、戦後間もない日本から渡米した江藤夫妻にとって、アメリカ流の生活は、まだすべてが目新しく、慣れない日常であったはずである）。

二つ目は、江藤がまだ少数である友人・知人と近隣の人たちを招いて、ささやかなパーティを自宅で開く場面である。この場面も、かならずし

も英語に堪能とはいえない夫人を巧みに巻きこんで、パーティを成功させるだけではなく、発展的な人間関係を築くことにも足がかりを作るのである。

三つ目は、留学先のプリンストン大学で、江藤が小林秀雄に関する講義を行って、聴講者に日本文化に対する理解を植えつけることになる場面である。

この講義の成功には、江藤の不眠不休の努力が強調されているようである。たしかに、それなしには成功しなかった結果であろう。

それに対して、最初の二つのエピソードでは、マイナスをプラスに転じるような、ちょっとした江藤の小技のさえが光っているようである。しかも、アメリカ流のやり方をうまく見抜いて行く江藤流が、うまくアメリカ人にも合うのである。若い江藤のアメリカ成功物語として、いかにもよく出来ているのである。

もつとも、再読してみると、初読の時に気がつかなかった点が気にならないではない。

プリンストンに入る前に、江藤夫妻は「加藤周一氏の客になった」として、カナダの大学町の状況が書かれている。

江藤と加藤の間に何があったかは分からない。むしろ、それは慎重に消去されているのであろう。代りに、「田舎大学」（と江藤には写ったらしい）を背景に加藤の「落武者的」な姿が見すほらしさを強調されているようである。当時の加藤は、まだ中年の評論家で、活力に溢れていた人物だったはずである。しかしながら、江藤の眼にはそのように写らなかったようである。「田舎大学」の背景だけが奇妙に意地悪く描かれている。

もう一つは、プリンストンのキャンパスを散策する江藤夫妻の写真である。これは、まだ江藤の存命中に、「群像日本の作家」という叢書で小学館から出版された論集・エッセ集の巻頭を飾っている十数葉ほどの

ポルトレート一枚である。プリンス頓時代の写真は、これ一枚で代表されているようである。

夫婦は、大学のキャンパスを並んで散策しているらしい。江藤は背広姿でズボンのポケットに無造作に両手をつっ込んで、打ちとけた風情である。対照的に夫人は、何となく緊張気味らしく、一張羅に身を包んでいるようである。特に、装飾的特徴的な帽子が目立っている。『アメリカと私』の本文ではすでに述べたように、夫妻の見事な連携プレーに感心させられるのだが、それだけに、この写真は、何となく二人のちぐはぐな姿が見えるように思われる。

一枚の写真に私はこだわり過ぎたのであろうか、けれども、日本人の留学生生活は、夫婦であろうと、単身であろうと、残酷な一面をも持っているであろう。

夏目漱石のロンドン生活を描く江藤の筆は、はるかに容赦がないように思われる。じつさい、伝記作者江藤は自分たちの成功物語の高みに立つて、惨めな単身留学生夏目金之助の日常を裁いているようにさえ思える。

しかも、漱石は『文学論』の構築という、狂気を誘発しかねない仕事と取り組んでいたのである。

留学生漱石の孤独は漱石自身が繰り返し書いているし、かなり穏健な筆致で小宮豊隆も書いている。江藤の伝記はその流れをさらに異様に強化しているように見える。

このような状況であるからこそ、冒頭で紹介した鏡子の一通の手紙は充分な意義があると思われる。

次に、大岡昇平について述べねばならない。彼の戦後の作家活動は、アメリカ軍の捕虜収容所での日常生活を描写した記録から始まった。この作では、エピグラフとして、ダニエル・デフォーからの「監禁状態」

についての引用があり、大岡の作家活動のイギリス近代小説とのつながり意識は、最初から鮮明であった。しかしながら、大岡については何よりも、『レイテ戦記』のことを書かねばならない。

『レイテ戦記』は月刊雑誌『中央公論』の一九六七年一月号から三十回にわたって連載される。

この時期は、日本の諸大学の学園紛争が燃えさかろうとする時期と重なる。とりわけ、東大、日大の運動に代表されるが、その勢いが近い将来に飛び火するのは火を見るよりも明らかであった。立命館は、京大とともに、学生間のセクト的対立が激烈で、それは教員間にも多少とも及んでいた。その中で、とりわけ文学部は孤立的で、それは翌年一月末の執行部総辞職という結果につながる。それにしても、その前後の無残としか評しようのない状況を見定めている人はまだ少なかつたであろう。その状況から生き残ったものとして、これまでの学部の記録が十分ではない以上書く義務を感ずるが、今はレイテ戦と『レイテ戦記』を優先しよう。

レイテの戦いを日本軍は、太平洋戦争の天王山と呼び、レイテ決戦を呼号していた。その象徴とも云うべき戦いが、特攻機によるアメリカ軍に対する自爆攻撃であり、またレイテ湾に結集するアメリカ海軍への、連合艦隊による、いわばなぐり込み攻撃であった。

レイテの攻防の頃、わたしは国民学校の三年生であったが、幼い小学生も巻きこむ戦いとなるのが必然であった。

特攻機の編隊が自爆攻撃を敢行するたびに、私たちは自爆した「英雄」への「黙祷」を捧げることになる。

初冬の京都の底冷えが長時間の黙祷の間に、半ズボンの脚にじわじわと伝わってくる感覚は、七〇年の歳月を越えて今だに蘇るかのような錯覚にとらわれる。



すでに述べたように、『レイテ戦記』は『中央公論』に三十回にわたって連載された戦記である。陸海軍にわたって日米両軍の死力を尽した戦いが詳細に描かれている。その経過をここで述べるのは適切ではない。文庫本で一五〇〇ページになる戦記は、大岡により書き上げるのに膨大な時間と精力、手間を要したであろう。彼の死の直前、口述筆記されたという短い文章が残されている。それによると、ある時期の文芸部門の賞の対象になりながら、大岡は選考委員の努力が足りなかったと批判したという。大岡は文壇や文学賞の選考における機微に通じていることは、現役の文学者で誰にも負けないほどの経歴を持った人である。自分の作が十分な評価を受けなかった経験も何度もあったに違いない。しかし、『レイテ戦記』の場合は、死期に近いことを知りつつ、口述筆記で選考委員を批判することを敢えてしたという。死を前にして、それだけの自信を大岡がこの作に対しては持っていたのであろう。

### 3 論争が始まる

大岡昇平は江藤との論争を『朝日新聞』の誌上でおもむろに始めている。「江藤淳氏の労作『漱石とアーサー王伝説』が話題となっている。」雑誌『国文学』が特集を組んでいることも言及している。

だが、『朝日新聞』の文化面「日記から」の福永武彦からの引用「肩を凝らさずに読むことができる」は少し分りにくい。

大岡の『週刊読書人』からの引用として、江藤淳自身が「文学研究の厳格な手続きによった」と苦心と意図を語ったとしている。

大岡は地位の定まった評論家が学位論文を書くのは「異例のことである」と評し、江藤の方法についても批判と思われるコメントをつけている。すると、福永の「肩を凝らさずに読むことができる」という評も、皮

肉なのであろうか。

ご苦労なことと云われるかもしれないが福永の短い言葉は、このあとも大岡が江藤の返答、大岡の再批判と続くので、福永のコンテキストを知りたかったのである。

バックナンバーを調べて見て、少なくとも私には意外なことを知った。福永は幼い頃にアーサー王伝説の絵本、あるいは子供用の物語を読んでいる、懐かしく思い、それで「肩を凝らさずに」読んだらしい。皮肉めいたものは感じられなかった。

すると「厳格な手続き」と並べて皮肉っぽい意味に仕立てたのは、大岡のジャブなのだろうか。しかし、福永がどうあれ、大岡は以下批判を鮮明に行き。

大岡は、「薙露行」の材源で、テニソンが「アルチュウ王の死」に由来することを成果と評論しながら同時にそれが、「江藤氏の歌謡曲のような詠嘆を伴った文章」と呼び、批判を明らかにしている。ここで江藤は、テニソンに登場する「シャロットの女」に「禁忌」を見出し、「罪」と「破局」に「因数分解」する。すなわち、「薙露行」を、罪と死・破局の物語とする。ここに、作中人物への挽歌が、漱石の愛していた嫂登世への挽歌でもある、という関係が成立する。大岡の最も批判するのがこの点である。

江藤は、『朝日新聞』誌上で反論することになるのだが、『漱石とその時代』以来重視して来たはずの登世はここで登場しない。

むしろ、大岡に反論するというよりも、彼が「読み落とししたもの」を強調することによって「年齢とか身体障害とか」を持ち出しているとして大岡により厳しく批判されてしまう。先に福永武彦を引用したのと同じ様に、大岡は、江藤の武器を巧みに使って攻撃するのである。

しかしながら、江藤のテニソンの読みでは、漱石の恋人＝登世につな

がるのだが、テニソン観自体が、あまりにも江藤流になっているのではなからうか。

#### 4 伝記と詩

テニソンはワーズワスのあとを継いで桂冠詩人となった。桂冠詩人のイメージは宮廷の歌会始めの歌人と同じように、御用歌人的なイメージで見られるようである。(江藤淳の自分の年譜に歌会始めに陪席したことを書き込んでいる)。

しかしながら、テニソンは、たとえばクリミア戦争でイギリス軍の作戦上の失敗を厳しく批判している。この詩は有名な「新体詩抄」に翻訳されて収録されたのだが、むしろ誤解をされてしまったらしいことを、私は以前に指摘したことがある。

ここに江藤の『漱石とその時代』出版当時の書評がある(評者は、当時はイギリス文学出身の磯田光一である)。磯田らしい鋭い見解も多く見られる。

江藤の祖父、江藤安太郎の創ったと云う、「明治の日本」への過剰な讃辞も十分見える。じつさい、留学生夏目金之助が下宿に閉じこもって、『文学論』に専念する姿などは、文部省留学生として、最初から落第に近く、少なくとも疑問符をつけられる存在だったのであろう。江藤の伝記には、『文学論』の評価だけではなく、その構築に苦闘する金之助の姿もほとんど描かれることはない。彼の異常な神経には言及されるけれど。対照的に江藤が強調するのは、五高時代に、金之助が中間管理職として、また官僚としていかに有能さを発揮したかである。

磯田は、この面を賞讃するが、さすがに、金之助の生き方の、明治国家全体の進展との遊離には控え目に苦言を呈している。すなわち、「明治

が漱石を離れて肉感的に生きてしまっていることに私はいささか当惑する。」

評者磯田の当惑は理解できる。しかし、「ジャパン・アズ・ナンバワン」の時代が始まりつつある時代に、漱石伝を書き始めた江藤、それを評する磯田、ともに時代の大きなウズに巻きこまれていたのだろうか。

江藤の『アメリカと私』の新版の在庫を問い合わせた大きな本屋のチェーン店は、版元にも増刷の見込みはない、しかし、江藤さんの西郷隆盛伝はストックあります、と答えた。伝記作者も書く対照に「当惑する」時代である。

#### 5 論争のはてに

大岡昇平は一九八九年に死んだ。彼の死の直前のインタビューにはすでに言及した。晩年に書いた、いくつかの文は『昭和末』(岩波書店)にまとめられているが、この論文の中で引用、あるいは言及したのもある。

昭和天皇の死についても大岡は発言し、それに対する批判もあったと記憶している。彼の『レイテ戦記』とのかかわりはどうであろうか。フィリピンで捕虜となり、『レイテ戦記』を書き上げた大岡昇平も、あまりに日本人であったという感想もあるが、ここでは、もう一度、江藤淳との論争にもどっておきたい。

大岡昇平は、『薙露行』の構造」と題する論文で、最後に長い注を付けている。特に二つ目の注は、約七千字におよぶ長い注である。最初にここでも江藤を批判しつつ、大岡流の作品への見方がくり返される。注目すべきは次の一節であろう。

「偏見を去って観察すれば『漾虚集』収録の作品の多くは自然主義以前

の「小説」の通念、つまり何か刺激的な面白い読物として書かれているものとみなすのが適当であろう。」と述べ、「真に近代的な小説を書き出すのは、通説の通り『それから』からであろう」とする。

最後にもう一度江藤批判があり、とどめを刺したかのようなのである。しかしながら、「通説」の確認であるとすれば、江藤との、あれほどの論争は何であったのだろうか。

大岡には、「幻想の生れる場所」という興味深い章が『小説家夏目漱石』の中にあつて、「漱石では読めるのは「夢十夜」だけだ」という、戦後間もない頃に書かれたらしい、威勢のよすぎる感想も残っている。

小説家の立場や意見がゆれ動くのは、むしろ当然で正道でもあるはずで、非難するつもりはない。ちなみに、『薙露行』の構造』に大岡によって付けられた長い注は、単行本『小説家夏目漱石』では削除されているらしい。

この論は、夏目鏡子の手紙から書き始めたが、漱石の留学のかかえる問題も、まだまだ解決したとはいえないであろう。

江藤淳の伝記が未完のまま残されたのも残念である。もちろん、『明暗』が未完に終わったのは、それよりはるかに残念である。漱石という人の残した謎の大きさに慄然とせざるを得ない。

大岡も指摘するように、江藤は漱石をあまりにも登世に関連づけて、ロンドンにおける漱石を描くのに片寄りが生じたのであろう。

テニソンを読むにあたって、恋愛詩中心の読み方が、詩人テニソンを限定してしまい、漱石のテニソン観にも影響したのではなからうか。

伝記と詩は意外に相互的に補い合う面を持ちつつ、一方が他方を限定するのではなからうか。

(本学名誉教授)